

平安文学における「雪」の学習指導

平林優子

はじめに

高等学校における古典の学習指導は、文法と現代語訳とに偏りがちである。古文にほとんど接したことがない生徒が、初めて文語文法を習い、古語辞典で重要語句を調べながら、まとまった文章を読まねばならないのだから、何が書かれているのかさえ理解出来れば満足してしまう気持ちも分らないではない。しかし、古典の文学作品は、長い年月にわたって、人から人へと大切に読み継がれて来ており、魅力的な作品の世界を伝えようとする努力が、もつと払われてよいように思われる。生徒の興味を引き出す方法として、かつて「処女塚」の話型に注目し、通史的に上代から近世まで四つの作品（『万葉集』・『大和物語』・『源氏物語』・『雨月物語』）を読み、作品間の時代を超えた繋がりを感じ取ることを試みたが^{注1}、今回は平安時代（中古）の作品にしばって、当時

の人々が「雪」をどのようにとらえていたかについて考える授業を、提案してみたい。何らかのテーマを意識して教材を読むことは、古典文学作品への理解を深めるきっかけとなるはずである。

「雪」を選んだ理由は、全く降らない地域がある一方で、何メートルも降り積もって冬場の人々の生活に大きな影響を与える地域もあり、降雪量・積雪量の地域差が大きいことによる。当然、住む場所によって、人々の「雪」に対する思いは異なり、生徒たちも、各自の体験に基づき様々な思いを抱いているに違いない。平安文学には、主として平安京に住む王朝貴族たちがとらえた、ある意味特殊なイメージの「雪」が描き込まれているわけだが、それを知ること、平安時代の貴族たちと現代に生きる自分たちとの感覚の違いや、平安京（南北一七五三丈〃約五・二キロメートル、東西一五〇八丈〃約四・五キロメートルと範囲が限られている）と現在自分が暮らしている土地との風土の違いなどに

気付き、時代や地域間の比較が可能となるのである。

なお、複数の文学作品を扱うため、教科は「古典」を想定している。学習指導の進め方としては、最初に「雪」についての予備的な知識を押さえた上で、平安時代の美意識の規範となる『古今和歌集』を取り上げ、平安貴族の雪に対する一般的なイメージを知る。そして次に、『枕草子』と『源氏物語』に描かれた「雪」が、この時代に一般的なものなのか、それとも作品独自のものなのかを、他の作品（『伊勢物語』・『紫式部日記』など）も視野に入しながら見て行きたい。

一、雪を扱う「古典」の教材

平成二十一（二〇〇九）年度使用の「古典」教科書は、十社二十二種類を数える。その中から、単なる風景の描写や漢詩・和歌の引用（引詩・引歌）ではなく、雪が大きな役割を果たしている教材だけを挙げてみる。

〈平成二十一年度の「古典」教科書一覽^{注2}〉

- ① 「新編古典」（東京書籍）
- ② 「精選古典」（東京書籍）
- ③ 「古典 古文編」（東京書籍）

- ④ 「高等学校古典 古文編 改訂版」（三省堂）
- ⑤ 「新版 古典」（教育出版）
- ⑥ 「古典 古文編」（教育出版）
- ⑦ 「精選古典 古文」（教育出版）
- ⑧ 「古典2 改訂版」（大修館書店）
- ⑨ 「新編古典 改訂版」（大修館書店）
- ⑩ 「古典1 改訂版」（大修館書店）
- ⑪ 「精選古典 改訂版」（大修館書店）
- ⑫ 「古典古文編」（数研出版）
- ⑬ 「新 精選古典」（明治書院）
- ⑭ 「高校生の古典」（明治書院）
- ⑮ 「古典」（右文書院）
- ⑯ 「新古典」（右文書院）
- ⑰ 「精選古典 古文編」（筑摩書房）
- ⑱ 「新編古典」（筑摩書房）
- ⑲ 「古典」（筑摩書房）
- ⑳ 「高等学校 改訂版 古典 古文編（第一学習社）」
- ㉑ 「高等学校 改訂版 標準古典」（第一学習社）
- ㉒ 「高等学校 古典（古文編） 改訂版」（桐原書店）

〔雪の教材〕^{注3}

枕草子

「春はあけぼの」(一段) ④、⑥、⑫、⑬、⑭、⑯、⑰、⑱、
⑲、⑳、㉑、㉒

「二月つごもりごろに、風いたう吹きて」(一〇二段) ③、

④、⑤、⑥、⑩、⑪、⑫、⑬、⑯、⑰、㉒

「村上の先帝の御時に」(二七五段) ⑳

「宮にはじめてまゐりたるころ」(一七七段) ③、⑤、⑦、

⑫、⑳

「降るものは」(二三三段) ⑰、⑱、⑲

「雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて」

(二八〇段) ①、③、④、⑨、⑯、⑰、⑱、⑲、⑳、㉒

源氏物語

「雪の日、明石の君、乳母と和歌を唱和する」(明石の姫君を

二条院に迎える袴着のこと) (薄雲卷) ⑤、⑦、⑧、⑰、⑱、

⑲、㉑

「勾宮再び浮舟に忍び、対岸の家にこもる」(浮舟卷) ⑫、㉒

紫式部日記

「里居の物憂い心」 ⑤、⑦

伊勢物語

更級日記

「小野」(第八三段) ⑤、⑦、⑭、⑮、⑰、⑱、⑲、⑳

「家庭に安住、物語で、まず石山に籠る」 ②、③

万葉集

筑波嶺に 雪かも降らる いなをかも かなしき児ろが 布^ふ

乾^はさるかも (東歌・卷十四・三三五) ⑰、⑲

古今和歌集

霞たち木の芽もはるの雪降れば花なき里も花ぞ散りける (紀

貫之・春上・九) ②、③、④

冬ながら空より花の散りくるは雲のあなたは春にやあるらむ

(清原深養父・冬・三三〇) ㉑

あさばらけ有明けの月と見るまでに吉野の里に降れる白雪

(坂上是則・冬・三三三) ⑰、⑲

春日野の雪間をわけておひいでくる草のはつかに見えし君は

も (壬生忠岑・恋・四七八) ⑭、⑱、㉒

新古今和歌集

山深み春とも知らぬ松の戸^とにたえたえかかる雪の玉水^{たまみづ} (式子

内親王・春上・三) ②、③

ふればかく憂^{うれ}さのみまさる世を知らで荒れたる庭に積る初雪

(紫式部・冬・六六一) ⑭

駒とめて袖うちはらふ陰もなし佐野のわたりの雪の夕暮（藤原定家・冬・六七一）⑤、⑬

玉葉和歌集

さゆる日のしぐれの後の夕山にうす雪ふりて雲ぞ晴行く（京

極為兼・冬・九四四）⑫

新葉和歌集

都にも時雨やすらんこしぢには雪こそ冬のはじめなりけれ

（宗良親王・冬・四一〇）⑭

徒然草

「第三二段」⑮

「第一三七段」⑥、⑩、⑪、⑫、⑮、⑱

近世俳句

応々といへど敲くや雪の門（向井去来）④、⑫

雪とけて村一ぱいの子ども哉（小林一茶）⑥、⑬、⑭、⑫

心からしなの、雪に降られけり（小林一茶）⑤、⑬

是がまあつひの栖か雪五尺（小林一茶）⑥、⑩、⑪、⑬、

⑰、⑱、⑲、⑫

下京や雪つむ上の夜の雨（野沢凡兆）⑫、⑰、⑫

当然のことながら、教材選択は、雪が描かれているかどうかにか

注意して行われてはいない。だが、結果的にせよ、雪の教材はそれなりの数を占めている。これだけの数が揃えば、既存の「古典」教科書を使用して、雪をテーマとした学習指導が可能だろう。

時代別では、平安時代の作品がとりわけ多い。それは、この時代の文学作品の採録数が多いことも一因だが、平安の人々にとって、「雪」が特別な存在だったからである。平安文学と雪は、切っても切れない関係にある。このテーマに関しては、通史的にとらえようとするよりも、平安文学を集中的に扱った方が効果的なのである。また、同時代の教材は、続けて扱うのが比較的容易なため、まとめて授業を行いやすいという利点もある。

他には、多くの教科書が取り上げる、小林一茶の句に注目しておきたい。一茶は、年の半が雪に埋もれる豪雪地帯柏原（長野県上水内郡信濃町）の住人であった。このような土地に住めば、人々の生活は、雪から影響を受けずにはすまされない。「是がまあつひの栖か雪五尺」の「五尺」とは、約一五〇cm。深い積雪によって、人々是否応なく家の中に閉じこめられ、雪を優雅に眺める余裕などあるはずもない。一方、「雪とけて村一ぱいの子ども哉」からは、ようやく雪解けを迎え、外で動き回れるようになった喜びが伝わって来る。つまり、雪の降り方次第で、人々の

雪に対する好悪の感覚やイメージには、大きな違いが生じるわけである。ちなみに、一茶は、採録された句以外にも、「はつ雪やといへば直に三四尺」・「雪ちるやおどけも言へぬ信濃空」・「粧形に吹込雪や枕元」など、柏原の雪についてよんでいる。生徒の注意を、自分の住む地域と柏原との相違、そして雪国の厳しさに向けるため、最初に紹介してみるのもよいだろう。もし降雪量の少ない地域なら、「雪が一五〇cmも積もったらどう思うか」、反対に豪雪地帯であれば、「雪がほとんど降らない地域の人々は雪に対してどのような思いを抱いていると思うか」といった質問を投げかけ、まずは、地域によって人々の雪に対する思いには違いがあるのだと、自身の体験をもとに気づかせたい。その上で、京都という一地点へ、関心に向けて行くことにする。

二、現代の雪と平安時代の雪

近年の京都の積雪は、温暖化の影響もあり、平安時代と比べると随分少ないと言われる^{注4}。実態を知るため、気象庁のホームページ「過去の気象データ検索」^{注5}を用いて、最近十一年間の年最多の「降雪」と「最深積雪」、およびそれを記録した月日、()内にわずかでも降雪が確認された日数の合計と降雪の深さの年合計値をあげておく。「降雪」より「最深積雪」が多い日は、前日まで

の積雪が消えずに残っていた場合である。

一九九九年	二月四日「降雪」六cm・「最深積雪」七cm（降雪が確認された日数）二八日・「降雪の深さの年合計値」九cm
二〇〇〇年	二月九日・六cm・七cm（三八日・一五cm）
二〇〇一年	三月九日・七cm・一一cm（三〇日・一二cm）
二〇〇二年	「降雪」「最深積雪」とも、〇cmの記録のみ（二六回・〇cm）
二〇〇三年	十二月一日・六cm・五cm（三四回・八cm）
二〇〇四年	十二月三十一日・〇cm・一cm（二七回・〇cm）
二〇〇五年	二月二日・一〇cm・一一cm／十二月二十二日・一〇cm・一〇cm（三六回・二二cm）
二〇〇六年	一月二十三日・三cm・二cm（九回・六cm）
二〇〇七年	「降雪」記録なし、「最深積雪」〇cmの記録のみ（二回・〇cm）
二〇〇八年	二月十三日 四cm・四cm（一三回・一三cm）
二〇〇九年	一月十二日 二cm・二cm（一回・二cm）

これらのデータを総合すると、以下の点が明らかになる。京都

では、ごくまれに十一月・四月に降雪が記録されるものの、概ね十二月から三月にかけて雪が降っている。また、二〇〇二年や二〇〇四年は、それぞれ二六回と二七回の降雪が確認されたにもかかわらず、一日の降雪が1cmに満たず、0cmの記録ばかりである。十一年間で最も雪が積もったのは、二〇〇一年三月九日の1cm。これでは、雪だるまを作るのがやっと、といったところだろう。せっかく雪が降っても、翌日にはそのほとんどが消えてしまい、少しずつ積もり積もって行くことがない。しかし、降雪回数は多く、一九九九年から二〇〇五年までは、年三〇回前後をコンスタントに記録している（余談ながら、二〇〇六年以降の急激な減少が気になる）。つまり、京都の降雪の多くは、さっと雪が舞い散るだけで、1cmも積もらないのである。

また、京都の雪の降り方には、①「西高東低の冬型の気圧配置のときの雪」と、②「南岸を低気圧が通ったときの雪」の二つのパターンが存在する。①は、シベリアからの寒気が積乱雲となつて、丹波の山々、そして北山を越え、京都盆地に雪を降らせる。いわば名物「北山しぐれ」の雪バージョンである。これに対し②は、春先や暖冬などで西高東低の冬型の気圧配置がゆるんだ時、太平洋岸の低気圧が雪を降らせている。①と②では、雪の降る時季や地域、雪を降らせる雲が北からやって来るのか南からやって

来るのかなど、様々な点において違いが見られる。降雪地域も、①は比叡山などの北部中心で、市内は雪が舞い散るかせいぜい数cm程度。②は、降っても宇治地方くらいまでのことが多い。^{注6} 京都市内の積雪が少ないのは、気象学的にも、しっかりと証明されていると言える。

ところで、平安貴族たちが暮らした平安京では、どのような雪が降っていたのだろうか。はたして、現代とは異なっていたのだろうか。天氣の記事が頻出する藤原道長の日記『御堂関白記』^{注7}には、雪に関する記述が散見し、年によってばらつきが見られるものの、現代と比べると積雪の多さが目立つ。日記が現存する約十六年間のうちで最も積もったのは、長保二（一〇〇〇）年正月十日の一尺二三寸許（約三六cm〜三九cm）。他にも、「不及寸」一回、「一寸許」四回、「二寸許」一回、「三寸許」五回、「五寸許」三回、「五六寸許」一回、「六寸許」一回、「七八寸許」一回の計十八日分の積雪が記録されている。一寸（約3cm）以上が記載されるところを見ると、このあたりが特筆すべき積雪の基準となっていたのだろう。一方、積雪の記録を伴わない降雪の場合には、「小雪下」・「雪下」・「雪降」などと記される。こちらの方が、四十一日（平安京以外に降ったことが明らかな場合は除く）と圧倒的に多く、平安時代も現代と同様、ちらちらと舞い散るだけ、

もしくはうつすらと積もるだけの雪の方が主流であったと思われる。

少し前置きが長くなったが、以上のようなことを予備知識として初めに押さえる。細かく説明する時間が確保出来ないようなら、教師が簡単にまとめた後、本題の『古今和歌集』に入るとよいだろう。

三、古今和歌集

『古今和歌集』では、周知のように、季節ごとの歌数が著しく異なっている。春歌（一三四首）と秋歌（一四五首）が多く、夏歌（三四首）と冬歌（二九首）^{注10}は、歌数が極端に少ないだけでなく、歌の発想も限られる。平安貴族は特別に春と秋を好み、平安京の風土がそのような感性を育んだ。盆地に位置する平安京は、夏はむしろ暑く、冬は底冷えがする。冷暖房などなかった時代、さぞかし過ごしづらかったことだろうが、そのような季節にも（そのような季節だからこそ）、人々は美や楽しみを見出した。実に、『古今和歌集』の冬歌二九首のうち二三首（約七九%）が、「雪」について詠んでいる。^{注10}雪は、平安貴族たちが待ち望んだ、冬の代表的景物なのである。

さて、「古典」教科書採録の『古今和歌集』雪の歌は、全部で

四首。教科「古典」は、様々なジャンルを幅広く取り上げるため、一つの作品から選ぶ量がどうしても少なからざるを得ない。必要に応じて、プリントなどで補足するとよいだろう。『高校生の古典』（教科書¹⁴）が、「雪」「月」「花」「恋」「旅」というテーマごとに和歌をまとめており、採録方法に工夫が見られた。そもそも和歌集の部立とは、テーマごとに和歌を分類したものであり、各教科書は、名歌をただ載せるだけでなく、もつとテーマを意識した並べ方をする必要があるように思われる。

『古今和歌集』については、この四首を使用し、最初に、雪の歌が「冬」ばかりではない事実^{注13}に注意させたい。九番歌は「春」、四七八番歌は「恋」の歌である。雪というと「冬」のイメージばかりが強いが、初春にも降るし、恋には景物として色を添えるのである。また、九番歌と三三〇番歌は、降雪を視覚的印象の似通う花の散る様子に見立てている。平安貴族たちは、降る雪を見れば散る花を、散る花を見れば降る雪を思い出していた。反対に、落花を降雪に見立てる歌は、『万葉集』八二三番歌^{注11}（教科書③採録）や『新古今和歌集』一一四番歌^{注12}（教科書⑫・⑮・⑰・⑲採録）に見出せる。生徒の反応次第では、雪が、月・波・雲にも見立てられること、雪と花の見立ての発想が奈良時代より延々と生き^{注13}続けて来たことなどに、触れてみるのもよいだろう。

本来、平安京に住む人々にとって、冬は忌むべき季節であり、春の到来こそが心待ちにされていたはずである。冬の象徴としての「雪」は、そのままでは寂しく暗いイメージしか持ち得ない。しかし、「花」に見立てられたり、春の訪れを告げる景物として歌に詠まれたりすることで、美しく明るいイメージの獲得が可能となる。そしてそこに、多くはない降雪回数とせいぜい数十cm止まりの積雪という、平安京の気象事情が大きく影響しているのと言うまでもないだろう。ここでは、雪が相反する暗さと明るさ両方のイメージを併せ持つ点、和歌によって花などに見立てられ風流なイメージを獲得した点を、押さえておきたい。つまり、平安文学に描き出される雪には、平安京に降る現実の雪と、『古今和歌集』に代表される和歌的イメージの雪とが、混じり合っているのである。

四、枕草子

『枕草子』は、雪の教材の宝庫である。^{注14}なかでも、「春はあけぼの」や「雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まありて」は、定番教材として知られる。まず、教材の採録箇所のうち、平安貴族たちや作者清少納言の雪への思いが窺える箇所を見てみよう。

・「春はあけぼの」

冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず。

(一段・二五頁一二行)

・「二月つごもりごろに、風いたう吹きて」

二月つごもりごろに、風いたう吹きて、空いみじう黒きに、A雪すこしうち散りたるほど、黒戸に主殿司来て、「かうて候ふ」と言へば、寄りたるに、「これ、公任の宰相殿の」とあるを見れば、^{ふじろうがみ}懐紙に、

すこし春ある心地こそすれ

とあるは、げに今日のけしきに、いとようあひたる、これが本はいかでかつくべからむと思ひわづらひぬ。(中略)主殿司は、「とくとく」と言ふ。げにおそうさへあらむは、いと取り所なければ、「さはれ」とて、

空寒み花にまがへて散る雪に

と、わななくわななく書きて取らせて、いかに思ふらむと、わびし。(二〇二段・二〇九頁一行―二一〇頁四行)

・「村上の先帝の御時に」

^{むらかみ}村上の先帝の御時に、B雪のいみじう降りたりけるを、^{やう}様子に盛らせたまひて、梅の花をさして、月のいと明かきに、「これに歌よめ。いかが言ふべき」と、^{ひやうふ}兵衛の藏人に給はせ

たりければ、「雪月花の時」と奏したりけるをこそ、いみじうめでさせたまひけれ。「歌などよむは世の常なり。かくをりにあひたる事なむ言ひがたき」とぞ仰せられける。

(二七五段・三〇四頁一二行―三〇五頁四行)

・「宮にはじめてまゐりたるころ」

ゐざりかくるるやおそきと、上げ散らしたるに、雪降りにけり。登華殿とうかうでんの御前は立部たちしやう近くてせばし。雪、いとをかし。(中略)大納言殿のまゐりたまへるなりけり。御直衣、指貫の紫の色、雪に映えていみじうをかし。柱もとにゐたまひて、「昨日今日、物忌に侍りつれど、C雪のいたく降りればべりつれば、おほつかなさになむ」と申したまふ。『道もなし』と思ひつるにいかで」とぞ御いらへある。うち笑ひたまひて、『あはれと』もや御覧するとて」などのたまふ御ありさまども、これより何事かはまさらむ。物語にいみじう口にまかせて言ひたるに、たがはざめりとおほゆ。

(二七七段・三〇七頁一五行―三〇九頁一五行)

・「降るものは」

降るものは雪あられ。霰みぞれは、にくけれど、白き雪のまじりて降るをかし。

(二二三段・三七〇頁一行―三行)

・「雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて」

D雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃すすびつに火おこして、物語などしてあつまりさぶらふに、「少納言よ。香炉峰かうろほうの雪いかならむ」と仰せらるれば、御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせたまふ。人々も「さる事は知り、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ。なほこの宮の人にはさべきなめり」と言ふ。

(二八〇段・四三三頁六行―四三四頁一行)

「春はあけぼの」と「降るものは」では、「冬」そして「降るもの」の代表として、真つ先に雪があげられている。それは、『古今和歌集』の冬歌のうち約七九%が雪の歌によつて占められていたの意識を共有しており、平安貴族の一員でもある清少納言にとつて、雪が特別に好ましい景物であつたことが窺える。「降るもの」は、引用部分にひき続き、「雪は檜皮茸ひのかわもみぎ、いとめでたし。すこし消えがたになりたるほど。また、いとおほうも降らぬが、瓦の目ごとに入りて、黒うまろに見えたる、いとをかし。時雨、霰は板屋。霜も板屋、庭」(二二三段・三七〇頁四行―七行)と、積もる雪と積もらない雪とを、はつきりと区別する。先に、『御堂関白記』が積雪量を記す時と記さない時のあることについて触れたが、積もる雪と積もらない雪とでは大違い。少しでも積雪

があれば、ぬかるんだ道で牛車の往来は困難を極めるが、舞い散るだけなら、風流な雰囲気味わっているだけでよく、現実の生活に及ぼす影響はほとんどない。それぞれの雪に対するイメージに違いが見られるのは当然なのだが、清少納言は、そのような現実を無視するかのよう、美的イメージのみに目を向ける。二種類の雪に霰を加え、それぞれが最も美しく積もる場所を提示することで、違いを描き分けようとするのである。積もり方の違いくらいまでは簡単に気づいたとしても、場所との相性までは、なかなか考えが及ばない。清少納言の視覚・聴覚を駆使する繊細な感性、雪に対する特別な思い入れの面目躍如といったところだろうか。

また、日記的章段の雪の教材には、四つの場面すべてにおいて、漢詩や和歌をふまえた風流なやりとりが交わされている。雪が降った絶好の機会を逃さず臨機応変にふるまうことが、宮廷女房たちには求められていた。「村上の先帝の御時に」以外は、定子中宮サロンの話であり、真名（漢字）をよく書いた母高階貴子の影響で、漢詩文にも造型が深い中宮を中心とした、華やかで知的なサロンの雰囲気伝わって来る。引用された漢詩・和歌と、
へへ内に、誰と誰のやりとりかを示す。

・「二月つこもりごろに、風いたう吹きて」〈藤原公任と清少納言〉

三時雲冷カニシテ多ク雪ヲ飛バシ、二月山寒ウシテ少シク春有リ（白氏文集十四・「南秦雪」）

・「村上の先帝の御時に」〈兵衛の藏人と村上天皇〉

琴詩酒ノ伴皆我ヲ抛ツ、雪月花ノ時ニ最モ君ヲ憶フ（白氏文集二十五・「殷協律に寄す」）

・「宮にはじめてまゐりたるころ」〈藤原伊周と定子〉

山里は雪降り積みて道もなし今日来む人をあはれとは見む

（拾遺・冬・平兼盛）

・「雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて」〈定子と

清少納言〉

遺愛寺ノ鐘ハ枕ヲ欹テテ聴キ、香炉峰ノ雪ハ簾ヲ撥ゲテ看ル（白氏文集十六・「香炉峰下に新たに山居を卜して草堂初めて成り、偶東の壁に題する五首」のうちの第四首）

『和漢朗詠集』に多く採られる、『白氏文集』の人氣が高い。平安時代の日本は、政治的にも文化的にも、中国（唐・宋）をお手本としており、『白氏文集』の引用からは、そのような時代の息吹が伝わって来る。欧米にばかり目が向いている現代の高校生に

は理解しにくい感覚なので、注意を促しておく必要があるだろう。そして、このようなやりとりは、当然、双方が引用された漢詩や和歌を知っていなければ成り立たない。『古今和歌集』の歌のすべてを暗記していた宣耀殿女御（村上天皇の女御。藤原芳子）の例は特別としても、平安貴族たちの日常生活に、和歌や漢詩はこのような形で深く入り込んでいたのである。

ところで、各場面の雪は、どのように降っているのだろうか。傍線部 A の時のみが、ちらちらと舞い散る程度、他は、平安京にしては大雪ではないかと思われる。A の雪は二月、それもつごもりに降っていて、春の訪れを告げる景物として描かれている。春の予感に人々の心は自然と浮き立ち、風流をもつてその名を知られた公任が、高い教養を誇る定子・中宮・サロンの女房たちとそのような雰囲気共有すべく、歌の下句を詠みかける気になったのもうなずけよう。清少納言は、サロンを代表して、公任の気持ちによく応え、雪を花に見立てた上句をつけている。二人のやりとりは、『白氏文集』の漢詩をふまえるだけでなく、和歌の伝統もしつかりと受け継いでいると言える。

これに対し、傍線部 B・C・D の雪は、時季は不明ながら、いずれも降り積もる雪である。その結果として、人々の行動は著しく制限される。「雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐ

りて」のように、その場に居合わせた者同士、話はずむこともあるだろうし、困難をものともせず訪ねて行けば、「宮にはじめてまゐりたるころ」のように、相手に対する自分の誠意を強調することが出来るのである。「古典」教科書の多くが採録する、『伊勢物語』「小野」（第八三段）は、出家した惟喬親王を小野（大原のあたり）へ訪ねる男の話である。わざわざ正月に、それも深い雪をかきわけて会いに行ったことで、親王と男との親密な交流・男の誠意が印象づけられている。『枕草子』のこの二つの場面は、定子・中宮・サロンの風流な雰囲気伝えるものでありながら、同時に、平安貴族たちの雪の中の生活の一齣を映し出すものとなっている。

三田村雅子氏は、『枕草子』の雪について、「美的なものとして、あらゆる不純なものを覆いつくし、非日常の世界を現出させる化粧のように描き出される」と言う。^{注16}確かに、『枕草子』が描く雪は、美しく明るいイメージのものばかりである。中宮・定子は、長徳元（九九五）年四月十日に父道隆が死ぬと、権力を手中にした叔父道長によって、次第に追い詰められて行く。^{注17}清少納言の初宮仕えは、正暦四（九九三）年の初春または初冬と考えられているので、「宮にはじめてまゐりたるころ」―「雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて」^{注19}が、一条天皇の後宮で定

子が輝いていた頃なのに対し、「二月つごもりごろに、風いたう吹きて」は、長保元（九九九）年か長保二（一〇〇〇）年^{注20}。定子は、長保二年十二月十六日、御産のために死去するので、不遇な最晩年の出来事ということになる。しかし、暗い雰囲気はここでも全く感じ取れない。政争の影響などないかのように、帝と中宮は中略部分で仲睦まじく共寝し（「上のおはしまして、御とのもりたり」二〇九頁一二行～一三行）、以前と何ら変わらぬ生活が描き出されて行く。不遇な時代であっても、いや不遇な時代だからこそ、清少納言は雪の持つ明るいイメージの助けをかりて、苦悩に満ちた日常の中に、美しい非日常の世界を定位させようとしているのである。

五、源氏物語

最後に、『源氏物語』について考える。『源氏物語』が『枕草子』と決定的に異なるのは、「虚構の物語」という点である。『枕草子』の日記的章段では、現実には雪が降らない限り、雪の場面を設定するのは難しいが、『源氏物語』の方は、物語世界の動向や登場人物の心情にあわせて、雪をいくらでも降らすことが出来る。その上、降らせ方から積り方まで、自由自在に調整が可能なのである。よって、人事と自然が一体化する景情一致の原則により、

登場人物が重苦しい気持ちを抱いている時は、雪も暗いイメージを醸し出すのに対し、明るい気持ちの時は、雪のイメージも明るく描き出されることが多い。

『源氏物語』の雪の用例は、引詩・引歌・比喻などを除き、降雪・積雪が確認出来る場合に限ると、九二例^{注21}を数える。教材の採録箇所以外では、有名な場面として、次のようなものがあげられる。

ア 源氏が末摘花の醜い姿を見て驚く。（末摘花巻・冬）

イ 女童たちの雪まろばしを見ながら、源氏が紫の上に恋愛関係にある（あった）女たちのことを語る。（朝顔巻・十二月）

ウ 冷泉帝の大原野御幸。（行幸巻・十二月）

エ 新妻玉鬘のもとへ行こうとする夫髭黒に、北の方が火取の灰を浴びせる。（真木柱巻・冬）

オ 女三の宮との新婚三日目、紫の上を夢に見た源氏が、慌てて彼女のもとへ帰る。（若菜上巻・二月中旬）

カ 八の宮の死後、宇治で、大君・中の君が寂しい日々を過ごしている。訪ねて来た薫と和歌の贈答。（椎本巻・十二月・宇治）

キ 大君死去。（総角・十一月中旬・宇治）

ク 小野の浮舟が、新年、昔を思い手習いに歌を詠む。(手習・
一月初め・小野)

明るいイメージの雪はウだけで、他は暗く寂しいイメージばかりである。特にイ・エ・オは、『源氏物語』の男と女の三大修羅場と言ってもよく、思うにまかせない夫婦関係に悩み傷つき悶え苦しむ女の心情を、雪が映し出している。小山利彦氏は、『源氏物語』の雪の場面から受ける顕著な心象として、『暗さ、侘しさ、辛さ、悲しさ、厳しさといったもの』^{注22}をあげるが、このような雪は、『枕草子』の明るいイメージのそれとは、明らかに異質なものと言える。平安文学の双璧とされる二つの文学作品の雪のイメージが、これほどまで大きく異なる点は注目に値しよう。

なお、『源氏物語』の雪のイメージが暗い理由の一つとして、紫式部の越前(現在の福井県武生)滞在の影響が指摘されている^{注23}。紫式部は、長徳二(九九六)年の夏、越前守となった父藤原為時と共に下向し、一年あまりをその地で過ごした後、長徳三(九九七)年の冬、帰京した。越前は、豪雪地帯として名高く、『紫式部集』には、彼女が滞在中に詠んだ雪の歌が見える。

降り積みて、いとむつかしき雪を掻き捨てて、山のやう

にしなしたるに、人々登りて「なほ、これ出でて見たまへ」といへば

ふるさとに かへるの山の それならば 心やゆくと ゆきも見てまし (二七番・一二四頁一〇行―一二五頁三行)

「いとむつかしき」という言葉には、雪を忌み嫌う強い気持ちが表れている。都育ちで帰京をひたすら心待ちにする紫式部にとって、すべてを埋め尽くす越前の深い雪は、うんざりする以外の何物でもなかったろう。小林一茶の句に窺えるように、豪雪地帯に住む者の雪への思いは複雑である。何度も越冬を経験すれば、春の訪れを喜ぶ心境になれたかもしれないが、たったひと冬の滞在では、雪に対するマイナスのイメージしか生まなかったようである。

教科書^④が採録する、『新古今和歌集』の紫式部の歌もまた、雪のイメージは随分と暗い。この歌は、『紫式部集』にも収められ、初雪が降った折、同僚の女房らしき人から歌を贈られたのに対する返歌ということになっている。雪を心待ちにする平安貴族たちにとって、初雪は特別な意味を持つ。相手は、め度たい初雪にことよせて親愛の情を示して来たのだから、雪をめで、『枕草子』のような風流なやりとりが交わされてもよいのではないか。

しかし、紫式部は、生きづらさを嘆くばかり。美しい初雪も、暗く沈んだ気持ちを和ませることはなく、苦悩の多い現実世界に出現した別世界としてしかとらえようとしていない。越前での体験が影響してか、紫式部は、一般的な平安貴族たちとは異なり、雪に対してあまり好印象を抱かず、圧倒的に暗いイメージを抱くことの方が多かったわけである。

さて、『源氏物語』からは、二つの雪の場面が採録されている。多くの教科書が、先にあげたオの直前、紫の上が夫光源氏を新妻女三の宮のもとへと送り出してももの思いにふける場面を取り上げるが、残念ながら、ここには雪の記述がない。翌朝、積雪が描き出されるのだから、紫の上が寝付かれずに苦しんだ夜中にこそ、雪は降っていたはずなのだが……。次の明石の君と娘明石の姫君との別れの場面は、七つの教科書が載せている。

・「雪の日、明石の君、乳母と和歌を唱和する」「明石の姫君を二条院に迎える 袴着のこと」

I 雪、霰がちに、心細さまさきて、あやしくさまごまにもの思ふばかりける身かな、とうち嘆きて、常よりもこの君を撫でつくるひつつ見あたり。II 雪かきくらし降りつもる朝、来し方行く末のこと残らず思ひつづけて、（中略）落つる涙を

かき払ひて、「かやうならむ日、ましていかにおぼつかなからむ」とらうたげにうち嘆きて、

III 雪ふかみ山みの道は晴れずともなほふみかよへあと絶えずして

とのたまへば、乳母めのとうち泣きて、

雪間なき吉野の山をたづねても心のかよふあと絶えめや
は

と言ひ慰む。IV この雪すこしとけて渡りたまへり。例は待ちきこゆるに、さならむとおぼゆることにより、胸うちつぶれて人やりならずおぼゆ。

（薄雲巻・②四三三頁一行～四三三頁三行）

この時、明石の君は大堰にいる。大堰をはじめとして、宇治や小野などの郊外は、平安京よりも雪が深い。傍線部Ⅰ・Ⅱ・Ⅲからは、烈しく雪が降り、そして積もる様子が窺え、身分が低いばかりに、かわいい盛りの娘を手放さねばならない母の苦悩と結び付く。^{注24}雪が積もるに従い、明石の君の悲しみや苦しみもまた、増して行くのである。明石の君と乳母との贈答歌では、雪が人の往来を遮断する点が強調されているが、雪に閉ざされ隔絶した大堰の邸で、明石の君はただ一人、もの思いを抱え続けることになる。

傍線部Ⅳでは、雪が少しだけ解け、光源氏がやって来る。もし、雪が烈しく降り続く中での訪問であつたなら、そこに夫の愛情や思いやりを感じ取り、女の心も、少しは慰められたかもしれない。しかし、不安を抱えつつも安定してしまつた男と女の間には、もはやそのような情熱的な出来事は起こり得ない。雪解けと光源氏の来訪は、愛しい娘明石の姫君との別離を意味する。結局、明石の君にとって、雪は何ひとつよい方向に働くことはなく、この場面は、『源氏物語』特有の、暗い雪のイメージを余す所なく描き出していると言えよう。

そして、もう一つは、浮舟巻からである。浮舟と契つた匂兵部卿宮は、帰京後、彼女を偲ぶ薫の姿を目撃したことで、再度の宇治行きを決行する。

・「匂宮再び浮舟に忍び、対岸の家にこもる」

かの人の御気色^{けしき}にも、いとど驚かれたまひければ、あさましうたばかりでおはしましたり。Ⅴ京には、友待つばかり消え残りたる雪、山深く入るままにやや降り埋^{うづ}みたり。常よりもわりなき稀^{まれ}の細道を分けたまふほど、御供の人も泣きぬばかり恐ろしうわづらはしきことをさへ思ふ。(中略)Ⅵかしこには、おはせむとありつれど、かかる雪には、とうちとけた

るに、夜更けて右近に消息したり。あさましう、あはれと君も思へり。右近は、いかになりはてたまふべき御ありさまにかとかつは苦しけれど、今宵はつましさも忘れぬべし、(中略)、いとはかなげなるものと、明け暮れ見出だす小さき舟に乗りたまひて、さし渡りたまふほど、遙かならむ岸にしも漕ぎ離れたらむやうに心細くおぼえて、つとつきて抱かれたるもいとらうたしと思す。有明の月澄みのぼりて、水の面も曇りなきに、「これなむ橘の小島」と申して、御舟しばしさしとどめたるを見たまへば、大きな岩のさまして、されたる常盤木の影しげれり。「かれ見たまへ。いとはかなけれど、千年も経べき緑の深さを」とのたまひて、

年経ともかはらむものか橘の小島のさきに契る心は女も、めづらしからむ道のやうにおぼえて、

橘の小島の色はかはらじをこのうき舟ぞゆくへ知られぬをりから、人のさまに、をかしくのみ、何ことも思しなす。(中略)、Ⅷ垣のもとに雪むら消えつつ、今もかき曇りて降る。 (浮舟巻・⑥一四八頁二二行―一五一頁一五行)

薄雲巻の大堰同様、宇治という、平安京以外の場所が舞台である。傍線部Ⅴでは、宇治へ近づくに従い、降雪・積雪が次第に多

くなり、雪をものともせず出掛けて行く匂兵部卿宮の情熱が示されている。激しい雪の中、予想に反してやって来た男の行動は待た右近を感動させ、浮舟自身も「あさましう、あはれ」と思わずにはいられない（傍線部Ⅵ）。雪が恋する男女の結びつきを強める、『源氏物語』ではめずらしい場面だろう。

やがて、匂兵部卿宮と浮舟の二人は、対岸の隠れ家でもこすため、宇治川を渡ることになる。ここでは、有明の月が出ているので雪は降っていないもの、積雪は残っていたと思われる。「このうき舟ぞゆくへ知られぬ」という浮舟の和歌の下句は、彼女を待ち受ける不吉な運命の予兆とされ、確かに、この後の展開を知った上で読み返すと、そのような解釈が成り立ち、雪も暗いイメージを持つようになってしまふ。しかし、この場に限ってみれば、全く別のイメージを見出すことが出来るのではないか。浮舟は、不安を抱えてはいるが、匂兵部卿宮との恋に酔いしれている。この逃避行は、『源氏物語』中、最もロマンチックでエロチックな恋の場面であり、宇治に降り積もる雪（傍線部Ⅶ）は、京や世間の存在を覆い隠し、人目を避ける恋人たちの逢瀬を優しく包み込む。『源氏物語』の景情一致の原則では、烈しく降る雪や深い積雪は、登場人物の暗い心情をあらわすはずだが、匂兵部卿宮と浮舟の恋情は、背景の雪の烈しさと呼応するかのように燃

え上がり、雪のイメージもまた、明るさを増して行くと言える。

むすびに

『古今和歌集』（和歌）・『枕草子』（随筆）・『源氏物語』（物語）という、異なるジャンルに属する三つの文学作品の雪について見て来た。教科「古典」の教材に限り、「雪」という非常に狭い視点からの考察ではあったが、小から大へ、巨大な平安文学の一端を垣間見ることが出来たのではないかと思う。雪の描き方一つをとってみても、多くの共通点と相違点が見出せるのである。

最近、国語教育では、「グローバル化」と「伝統」が重要視されている^{注27}。「古典」が主に担うのは「伝統」の方だろうが、「グローバル化」としては、中国文化との関係が注目に価する。『枕草子』の漢詩引用を出発点に問題を拡げて行き、中国文学から平安文学が受けた影響を考えることも可能だろう。また、「伝統」とは、今も昔も変わらずにあることではない。何が変わりし、何が変化せずに受け継がれたのか。同じ平安文学に分類される三つの作品の、それも雪の描き方という小さな点一つをとってみても、様々な違いが見て取れた。平安時代共通の感覚を基盤に据えながらも、多様な個性が光りを放ちながら変化を重ねて行くことで、新しい作品は生み出されて来たのである。「学習指導要領」は、教科「古

典」において指導する事項の一つに、「文章や作品に表れた人間、社会、自然などに対する思想や感情を読み取り、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること」^{注28}を挙げている。作品独自の世界を丁寧²⁸に読み解く授業が、「古典」の学習目標の達成には不可欠な事実を最後に強調して、本稿を終えることにする。

注

注1 拙稿「『処女塚』の話型への理解を深めさせる古典の学習指導」(『東京女子大学日本文学』第一〇四号 二〇〇八年三月)。

注2 教科書の番号は、文部科学省のホームページ「教科書目録」の順番に従った。

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/mokurukuhm

注3 以下表記は、『玉葉和歌集』と『新葉和歌集』については『新編国歌大観』(角川書店 一九八三年二月)、『紫式部集』については『新潮日本古典集成』(新潮社)、それ以外は『新編日本古典文学全集』(小学館)の各作品による。また、見出しについては、同じ場面であっても教科書間で違いが見られることから、『新編日本古典文学全集』で使用されているものに統一した。

注4 高橋和夫『日本文学と気象』(中公新書 一九七八年八月)。

高橋氏は、「温暖化がほとんどなかった明治以前では、雪はもっと降り、そして積もったに違いない。そういう市街地環境の人工的変化を頭にしまつて、京の雪を眺める時、古典の雪は幻想の現実となる。

街中よりも北寄りのあたりの雪景色がそのかみの都の雪だったのではないか」と述べている。

注5 <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php>

なお、京都地方気象台は、京都市中京区西ノ京笠殿町にあり、かつての平安京内に位置している。

注6 石井和子『平安の気象予報士 紫式部』(講談社+a新書 二〇〇二年十一月)。

注7 山本信吉「御堂関白記と小右記」(『国文学 解釈と鑑賞』至文堂 一九七二年四月)、前田惟義「御堂関白記」における天象の記述について(『平安文学研究』一九七八年十一月)など。前田氏は、道

長の「天候に対する敏感さ」について、「敏感な神経とか凝り性とかいった性格的なものと、病気になるやすい体質、気質に起因する所が大きいのではあるまいか」と指摘する。

注8 資料として、東京大学史料編纂所・陽明文庫編『大日本古記録 御堂関白記 上・中・下』(岩波書店 一九五二年三月〜一九五四年三月)を用いた。

注9 自筆本・古写本・平松本が現存するのは、ほとんど記載のない長徳四(九九八)年後半・寛仁四(一〇二〇)年前半・治安元(一〇二二)年後半を除くと、長保元(九九九)年・長保二(一〇〇〇)年の前半・寛弘元(一〇〇四)年・長和二(一〇一三)年・長和四(一〇一五)年・寛仁三(一〇一九)年の前半である。

注10 目崎徳衛「王朝の雪」(『数寄と無常』吉川弘文館 一九八八年十二月)。目崎氏は、冬歌に占める雪を詠った歌の比率が、『古今和歌集』

では七九%を占めていたのが、「後撰・拾遺・後拾遺の三集はほぼ四〇～四二%、以下漸減して『新古今和歌集』二一%となる」ことを指摘する。

注11 我が園に 梅の花散る ひさかたの 天より雪の 流れ来るかも

(大伴旅人・巻五・八二二)

注12 またや見ん交野のみ野の桜狩花の雪散る春のあけぼの (藤原俊成・春下・一一四)

注13 鈴木宏子「雪と花の見立て」考―万葉集から古今集へ―(『国語と国文学』一九八七年九月)。(雪と花の見立て)の和歌が、『万葉集』から『古今和歌集』へ、新たな創造を生みだしながら変化して行く様を辿っている。

注14 三田村雅子「枕草子『雪のいと高う降りたるを、例ならず、御格子参りて』段を教材として読む」(『新しい作品論』へ、〈新しい教材論〉へ 古典編3 右文書院 二〇〇三年一月)。「枕草子」は、降雪の記述が五〇例を越え、平安時代の作品の中でも群を抜いて多いとの指摘がある。

注15 藤本宗利「春はあけぼの」を活かすために」(『新しい作品論』へ、〈新しい教材論〉へ 古典編3 右文書院 二〇〇三年一月)。藤本氏は、「春はあけぼの」の四季それぞれの始まり部分で冬だけが、伝統性から逸脱せず、「雪の早朝」という「典型化された美」に言及しているとの指摘する。

注16 注14の三田村論文。

注17 長徳二(九九六)年五月には、花山法王に矢を射かけた伊周と隆家

が配流され、定子は出家している。

注18 『新編日本古典文学全集 枕草子』(小学館 一九九七年十一月)解説(四九一頁～四九二頁)。

注19 『新編日本古典文学全集 枕草子』(小学館 一九九七年十一月)頭注(四三四頁)は、「作者の宮仕え後まもない正暦五年(九九四)冬のことか」とする。

注20 『新編日本古典文学全集 枕草子』(小学館 一九九七年十一月)頭注(二〇九頁)。

注21 調査にあたっては、『CD-ROM角川古典大観 源氏物語』(角川書店 一九九九年十月)と『源氏物語大成』(中央公論社 一九五三年八月～十一月)とを併用した。「雪」以外では、「あは雪」・「薄雪」・

「雪間」・「雪まろばし」・「雪もよに」を含め、「糞」・「霰」は除外した。

注22 小山利彦「源氏物語にみる雪の表現―その心象と方法など―」(『雪と文学』教育出版センター 一九七九年十二月)。「源氏物語」の雪が暗いイメージを持つことは、他にも多くの論文が指摘している。

注23 注22の小山論文など。

注24 『新編日本古典文学全集 源氏物語②』(小学館 一九九五年一月)頭注(四三二頁)は、「灰色の空から間断なく降り続く雪や汀の水は、暗澹たる女の心そのものを表象。(中略)『源氏物語』の中でも象徴的表現の代表的な例である」と指摘している。

注25 林田孝和「源氏物語における「月光」の設定―臘月夜尚侍を焦点に―」(『国学院雑誌』一九六七年七月・八月)。林田氏は、この場面で不自然に有明の月が出ている理由を、「源氏物語」では男女の契り

の場面に月が設定されるからと考えている。

注
26

木村正中「入水への道——浮舟論（2）」『講座 源氏物語の世界 第九集』有斐閣 一九八四年十月）など。

注
27

石原千秋『国語教科書の中の「日本」』（ちくま新書 二〇〇九年十月）。

注
28

http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301.htm

（ひらはやし ゆうこ） 本学助教